

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (経済学)	氏名	陸 揚 (LU Yang)
論文題目	The Potential of Bottom-up Social Innovation for Rural Development: Three Cases in Japan (農業・農村発展におけるボトムアップ型ソーシャルイノベーションの可能性：日本における三つの事例にもとづいて)		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、ボトムアップ型ソーシャルイノベーション (SI) が、様々な課題に直面する日本の農村社会を再生し変革する可能性について、質的調査方法に基づく三つのケーススタディを通じて検証し、持続可能な農村発展に資する実践的・政策的な示唆を導出することを課題としている。</p> <p>序論にあたる第1章では、本論文の問題意識、研究の目的と課題および方法が提示されており、背景にある日本農村を取り巻く社会・政治・経済状況も簡潔に描写されている。</p> <p>第2章では、SIに関する世界と日本の先行研究のレビューを通じて、SI概念がどのように定義されてきたか、農村発展論および社会変革の文脈でSIがどのように議論されてきたかが整理されている。そして、複数主体間の複雑な関係性、多層的なガバナンスや社会構造的環境の作用、動的な形成・発展プロセスとして特徴づけられる、農村発展の文脈におけるSIの実態を捉える上での研究上のギャップが指摘されている。</p> <p>第3章では、前章での概念整理を踏まえ、①SIに関わる地域内外の諸主体で構成されるSIEコシステムとそれを取り巻く社会構造としての経済的・社会政治的環境との相互作用においてSIの動的プロセスを捉え、②SIEコシステム内外の諸主体間の複雑な関係性をSIの開発者・推進者・支援者らによるスケーリング戦略の実践において捉え、③それらを通じたボトムアップ型SIの展開が農村社会の変革 (課題解決) をもたらす可能性とそのダイナミズム (促進要因と阻害要因) を分析的に考察するために、著者が独自に構築した理論的分析枠組みとして「SI Dynamic Process Ecosystem Framework」が提示されている。</p> <p>第4～6章は三つのケーススタディにあてられる。第4章では、鹿児島県で有機農業と自然生態系に調和した暮らし方を地域に広げるために活動する「かごしま有機生産組合 (KOFA)」が、第5章では、京都府和束町や和歌山県みなべ市などで高齢化と労働力不足に直面する農村コミュニティと農業・農村での暮らしを模索する都市の若者を繋ぐことを目的とした事業を展開する社会的企業「アグリナジカン」が、そして第6章では、農業と農村コミュニティにおける女性の連帯とエンパワーメントのために活動する滋賀県の女性農業者ネットワーク「しが農業女子100人プロジェクト」が、それぞれ詳細に取りあげられている。</p> <p>第7章では、これら三つのケーススタディについて、共通の分析枠組みに基づく包括的な考察が加えられている。具体的には、①社会関係資本の賦存状況について、②社会・政治・経済的環境とSIへの影響について、③SIに関わる諸主体の役割について</p>			

て、三つの事例にみられる共通性や差異性が析出され、さらにSIの形成と展開のダイナミクス、そこで実施されるスケーリング戦略の促進要因と制約要因が整理されている。

終章にあたる第8章では、以上の考察がまとめられ、農村発展におけるボトムアップ型SIの可能性は、SIエコシステム諸主体の能力と献身、社会関係資本の獲得、スケーリング戦略の成否などによって支えられる一方で、SIを取り巻く社会・政治・経済的な構造的環境によって制約を受けることが結論づけられる。理論的には、構造と主体の両レベルに焦点を当てた多層的かつ動的なエコシステム・アプローチが、SIの発展とそれによる社会変革の可能性に関する包括的な考察、個別事例の理論的な把握を可能にすることが確認されている。最後に、ボトムアップ型SIを通じた農村社会の発展に向けた実践的・政策的な含意と残された研究課題が示され、本論文が締めくくられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日本の農業・農村が直面する様々な困難に対処するために限定的ながらも各地で生まれている創造的・革新的な取り組みを「ボトムアップ型ソーシャルイノベーション」として捉え、それが農村社会の再生と変革をもたらす可能性について、三つの事例研究に基づいて検証したものである。そこでは、ソーシャルイノベーションに関わる地域内外の諸主体の複雑で動的な関係性を含意するエコシステムと、それを取り巻く社会的・政治的・経済的な環境(社会構造)との間の、やはり複雑で動的な関係性を考察するために、関連分野(ソーシャルイノベーション論、農村発展論等)の先行研究を踏まえた著者独自の理論的分析枠組みが「SI Dynamic Process Ecosystem Framework」として提示され、三つの事例研究の包括的・横断的な分析が試みられている。それによって、ミクロ次元の限られた主体に過度に注目し、あるいはソーシャルイノベーションの直線的・段階的な発展経路を示すにとどまりがちな先行研究のギャップを埋めようとする、理論的・方法的にも意欲的な労作である。これが本論文の第一の意義である。

第二の意義は、三つの事例研究のそれぞれが単独でも学術論文へと昇華しうる密度と深度を有していることであり、それを支えているのが、①非構造化・半構造化インタビュー、②参与観察、③質問紙調査、④文書・メディア分析を組み合わせた質的調査手法の徹底と調査結果の丁寧な描写である。また、著者は中国人留学生ながら、これらの調査はすべて日本語で行われた。現場での独特の日本語表現や難解な政策用語を含め、調査結果を英語で論文化し、日本の事例を国際的な学術研究資料として共有できるようにしたことも重要な貢献である。

第三に、これまで個別事例の叙述に傾斜しがちであった農村社会研究の分野でも、欧州の研究者を中心に理論的分析や概念的把握が盛んに試みられるようになってきているが、本論文は多様な農村地域実践をソーシャルイノベーションとして把握し、その形成と展開の過程をスケールアウト、スケールアップ、スケールディープという三つのスケールアッププロセスとして多層的・複眼的・動的に分析する視点を提示した点で、当該分野での学術的貢献に繋がるものとして評価できる。

しかしながら、本論文にはいくつかの課題も残されている。

第一に、農村社会研究分野における学術的貢献および学際的研究の試みとしては高く評価できる、ソーシャルイノベーション論との接合、とくにエコシステム概念やスケールアップ概念を援用した理論的分析枠組みは、マネジメント研究分野からは陳腐に映じる可能性がある。三つの事例研究の豊かな中身を考察するうえでどこまで適切だったかは意見の分かれるところである。

第二に、それとも関わって、三つの事例の選定は、日本の農村が直面する諸課題と近年の政策動向(有機農業の推進、農業労働力の確保、女性農業者の活躍)に照らせば適切かつ説得的であったと言えるが、理論的分析枠組みの適用という点では、各事例の位置づけは必ずしも明確ではない。

第三に、本論文の主眼がソーシャルイノベーションをめぐる関係性と動態的プロセスの考察に置かれていたとはいえ、また、ソーシャルイノベーションの成果を量的に可視化するのはそもそも困難であるとはいえ、それぞれのソーシャルイノベーション実践がそれぞれの農村地域における社会変容に繋がるような実質的变化を具体的にどのように生みだしているのかが十分に論じられていない。

とはいえ、以上に挙げた諸課題は、将来に向けた著者の研究の発展方向を示唆したものであって、本論文が現時点において達成した学術的意義ならびに政策的含意をいささかも損なうものではない。よって、本論文は、博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、2024年2月13日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降